

JAMの主張

巨象を倒すために 「田中ひさや」の勝利が重要なファクター

機関紙JAM 2017年10月25日発行 第225号

ミツバチも大群となれば象をも倒す――。

15年以上も前のことになるが、FWUBC（在日ビルマ市民労働組合）のリーダーから耳にした、ミャンマー（ビルマ）の格言だ。企業資産を私的に流用していた経営者に立ち向かったJAMの仲間の争議への、メッセージに引用されていた。

10月22日に行われた第48回衆議院総選挙。「まさか！」の解散に続いて、「まさか！」の新党。「まさか！」の発言で、「まさか！」の展開。終わってみれば、引き続き、自公与党勢力が三分の二以上の議席を得て、「安倍一強政権」の継続を許す結果となった。

一方の野党側は、改選前には野党第一党であった民進党が衆議院から姿を消し、立憲民主党、希望の党、日本共産党、その他へと、細分化することとなった。

政治の世界は、まさに「数は力」。力の分散は相手を利することに他ならない。JAMは、結成時に確認した政治方針で、「政権交代による緊張感を持った政治体制」の追求を掲げており、連合の仲間とともに二大政党的な体制構築をめざした取り組みを続けてきた。当然のことながら、11月に始まる臨時国会以降、各政党・会派がどのような運営を行い、国会対策をとっていくのか、慎重に見極める必要がある。

しかし、どのような状況にあろうとも、働く者・生活者の視点に立った政治勢力が大きくまとまり、政権を獲得していくことを求め続けていく、われわれの姿勢に変わりはない。

JAMは、昨年夏に失った「国会のJAMの議席奪還」を期して、『田中ひさや』を先頭にした取り組みを進めている。『田中ひさや』は、JAMの仲間が日々額に汗して働いている全国1800余の職場の声の代弁者であり、政党の声の代弁者ではない。労働組合の活動として、堂々と活動を進めることが大切だ。地道な活動の積み重ねこそが、勝利をつかみ取る方程式だ。

日本政治の巨象を倒すために、われわれにできること。その重要なファクターが『田中ひさや』の勝利である。

副書記長 椎木盛夫